

學童の生活時間に関する調査

助教授 園 原 太 郎

第一章 序 説

一、問題 及 目的

兒童特に學童の生活活動が一日のうちに如何なる時間的分配をもつてゐるかについての調査は既に昭和十七年に日本青少年教育研究所に於てかなり綿密な研究調査が行われ、この方法は爾後各地の小學校等に於て小規模ながら踏襲せられ、各教師が受持兒童の生活實態を知る上に役立つてきた。最近には日本女子大學兒童研究所に於ても同様の調査がかなり大

規模に行われ、戦後の資料として注目せられてゐる。

日本青少年教育研究所の調査は昭和十七年十月初旬に行われた。⁽¹⁾ 小學校四年六年高等科二年の學童約二〇〇〇名につき、生活時間布置法 (method of log) を用いて週日及び休日の各一日の生活時間を調査し、千葉縣下農村兒童と東京市内都市兒童との比較が試みられている。その結果は總平均に於て次の如き値を示した。(第I表)

第I表 學童生活時間平均 (青木)

	男		女	
	週日	休日	週日	休日
睡眠	9°	9° 7'	8° 52'	9° 9'
學校生活	7° 10'	—	7° 52'	—
手傳	1° 4'	2° 13'	1° 22'	2° 46'
遊び	1° 9'	4° 28'	54'	2° 41'
讀書	31'	51'	28'	42'
豫習復習	49'	1° 11'	1° 6'	1° 22'
娛樂	27'	47'	22'	42'

學童の生活活動として重要なものは云うまでもなく、その過半を占める睡眠や學校生活を除けば、家事の手傳、遊び、及び豫習復習等の學習であるが、これらのもつ重みを、それを營んだものの百分率によつてみれば、總平均に於て週日で

第Ⅱ表 學童の生活活動内容別頻數率 (青木)

		週 日					
		計	男	女	農	都山手	都下町
手	傳	84.5	79.2	90.5	91.8	73.6	84.4
遊	び	73.5	77.3	69.0	60.4	80.6	87.3
讀	書	65.6	67.8	63.2	64.1	76.4	58.4
豫	習復習	66.7	60.5	73.5	64.4	68.5	64.9
		休 日					
手	傳	84.4	77.0	92.0	99.3	62.5	85.2
遊	び	92.0	92.4	91.0	94.2	82.9	97.2
讀	書	70.5	70.0	70.5	76.8	74.8	45.7
豫	習復習	67.0	58.5	75.7	64.4	68.5	65.7

兒童殊にその男子であるといわれる。そこに各地域の兒童の生活の特色がみられる。同じく農村や山手兒童は成人の要求に基づく生活が濃いとはいえ、農村ではそれが家事家業の手傳として現われ、山手では勉學として現われるが、下町兒童ではこの種の要求水準による生活がむしろ軽く兒童自身の生活要求の水準に傾く生活が濃く現われている(四二頁)。概観的にいうならば「兒童が幼少な程成人の兒童に對する生活の要求は低いので、兒童はそれ自らの生活要求の水準の高い生活を營むが、年齢が高まるにつれて、成人の要求が高まつて、成人の要求水準の高い生活が示されるようになってくる。……女兒は男兒に比べて成人の要求が高く示され、從て一般として勤勞生活は女兒の特色ある生活となり、また豫習復習もその生活は男兒に比して重い。これに比べて男兒は自己の生活要求による生活が濃く、遊びや讀書がその生活により重く示されているのである。……農村ではこの成人の兒童への要求が最も濃厚で、勤勞生活に特色づけられ、山手兒童では

は手傳、休日では遊びが第一位を占めている(第Ⅱ表)。一般に女子は男子に比し、農村は都市に比し、手傳の比重が大である。殊に東京山手では他に比べて手傳のもつ重みが著しく尠い。この傾向はその時間量に於ても略同様であるということができた。特に東京山手では男女とも他の地域に比して手傳が少く、豫習復習の時間が著しく多い特質が見られ、下町に於ては遊びが他に比して大なる重みを示した。學年的變化はこの調査の範圍では餘り變化がなかつた。高学年になる程手傳が多くなり、農村に於ては又休日にも於ける遊びが少くなるといふ傾向がみられた。かようにして、「勤勞生活の重い意味をもつのは農村兒童殊にその女子であつて、豫習復習の殊に重い意味をもつ生活をしているのは山手兒童特にその女子で、遊びの生活が最も重い意味をもつてゐるのは、下町

第Ⅱ表 學童の生活活動時間及び従事者率 (兒玉による)

			東京						農村	
			山手		下町		郊外		男	女
			男	女	男	女	男	女		
手 傳 い	子守り	% 時間	10	20	10	20	10	20	18	16
	1-2° (1.5-3°)									
	畑仕事	% 時間	10	25	20	(20-35)	20以下	(10-33)	40	13
	1-2° 1-1.5° 1-2° (1.8-4°)									
	使い	% 時間	19	13	32	18	19	17	僅	少
	1-2° 1-2° 約1°									
	掃除	% 時間	19	29	29	42	36	30		
0.5-1° 1° 1°										
食事手傳い	% 時間	7.5	25	8.5	31	17	47.5			
1° 1.4° 1-1.8° 1-1.6°										
風呂たきみ 水汲み	% 時間	(殆んどなし)						55	11.5	
1°										
草刈り 家畜の世話	% 時間	(殆んどなし)						41	7.5	
1-2.5°										
遊 び	讀書	% 時間	24		僅	少	25	9.5	21	43
	1.5° (1-2.5°) 僅少 1.2-1.9° (1.3-1.9°) 1°									
	ラジオ 話	% 時間	14	19.5			25.5	27		
	1° (1-2°)									
	室内遊び	% 時間	20				10	32		
0-1.5° (1-2°)										
球戯	% 時間	6.6	18.8			9.3	47			
1-1.6° (1.4-2°) 1.5° (1-2°)										
戸外遊び	% 時間	20		20	85	34		20	4.4	
1.5° (1.7-4°) 0.5-1.6° (1.6-3°) 1-2° (2-3°) 0.5-2° (6.6)										
勉 強	學校外の 勉強	% 時間	77	82	46.5	8.5(?)	57.6	72.6	48	71
	1-2.3° (1.5-2.7°) 1-1.5° (1.3-1.9°) 1.3-1.9° (1-2.2°) 1-2°									
	裁縫工作	% 時間	4	8	4	8				(7)
	0.8-2° (1-1.4°) 1-1.5° (1°)									
教會、塾 稽古事	% 時間	1	3.5	7.5	4.5					
1-1.5° 1-1.5°										

數字は概数を示すことが多い。

() 内は休日。

() なきは週日、週日休日大差なきもの、週日休日平均を含む。

それが豫習復習の生活として要求せられるが、下町商工地区の兒童では遊びの生活が濃厚で、いわば兒童自らの要求に基づく生活の濃いところにその特色が見られる」(八四頁) というのがその結論であつた。

日本女子大學兒童研究所の調査は昭和二十一年五月—六月の間の週日と休日の各一日について、東京及び愛知縣下の小學初等科四、五、六年男女計二〇〇〇名を對象とし、前記日本青少年教育研究所の方法と同一の方法を以て行われ東京山

手下町郊外及び農村の比較が試みられた⁽²⁾。その結果の詳細については未だ報告されていないが、概略叙述されているものを表に纏めれば、第III表の如くである。(表中空欄は前記文献に記載なきため不明のところである)。この報告では生活活動の細かい分類による個々の活動に就いて概観され、これらを手傳い、遊び、勉強等に纏めてその重みを比較することは、この表からはできない。併し略々前記日本青少年教育研究所の調査結果と一致する傾向を認めることができる。

外國に於けるこの種の研究の一例として、Goldberg, B. and Pressey, I. C. のものを挙げれば、第IV表の如くである。

第IV表 學童の生活時間平均時間
(アレンジャー)

	初等科4年	初等科5年	初等科6年
睡眠	10.3	10.5	9.7
食事	1.0	1.0	1.0
着衣	1.0	1.0	0.9
娛樂遊び(1)	3.0	2.9	2.4
學校生活	7.0	7.0	7.0
學習(2)	0.5	0.5	0.5
手傳、仕事	0.8	0.8	1.6
社會活動	0.0	0.0	0.1
その他	0.4	0.3	0.8

(1) 遊び、映畫、讀書、乗馬等を含む。
(2) 家での勉強、音樂を含む。

我國兒童に比べて、遊びの時間が比較的多く、家での勉強の時間が比較的少ないのが注目される⁽³⁾。

其他兒童生活活動の各象面についての生活實態に關する調査は數多く試みられているが、比較的われわれの調査に關聯あるものとしては、教育研究同志會の學童の生活調査(昭和十七年)⁽⁴⁾及び東京府社會教育課の少國民生活調査報告(昭和十八年)⁽⁵⁾をあげることができよう。前者は昭和十五、六年都市農村の學童

約二千八百名につき、質問紙法によつて生活内容を調査したものであるが、そのうちわれわれの研究に關聯ある結果を抜萃すれば、第V、第VI、第VII表の如くである。睡眠時間は男女地域の差による大差なく、手傳は都市に比べて農村が多く又男子より女子が多く、勉強時間は農村より都市が、男子より女子が多いなど、上述の諸調査とその傾向に於て變らぬものを示している。但しこの調査では睡眠時間や勉強時間について、その分散状況を記載している點が注目される。一般にこの種の調査に於ては、その中心傾向を示すのに平均値のみが示されている場合が多いが、手傳、遊び、勉強時間などの分布はかなり広い分散が豫想され且その分散の偏りも必ずしも正規分布が期待されないので、平均値のみによる比較では

の生活實態、一日を如何に過しているかを實證的に示し、環境による特徴が如何なる點に現われるかを明らかにしようとする。

第V表 學童睡眠時間分布% (初6, 桐原・依田)

		6.5°以下	7°	7.5°	8°	8.5°	9°	9.5°	10°	10.5°	11°	11.5以上	平均
都	男	0	0	3.3	3.3	5.6	16.7	24.4	24.4	12.2	7.8	2.2	9.39
	女	1.0	0	4.5	5.5	10.9	19.1	21.8	20.0	10.0	7.3	0	9.24
農	男	0.5	1.4	1.2	9.4	7.7	19.0	21.0	16.6	11.8	10.6	3.1	9.34
	女	2.0	0.9	4.5	6.7	10.3	21.5	17.2	20.4	9.2	6.0	1.3	9.11

第VI表 家事の手傳をなすものの% (初6, 平日 桐原・依田)

		掃除 (1)	(2)	(3)	お 使 い	子 守 り	野 良 の 傳	其 の 他
都	男	4.5	9.9	3.2	16.7	1.4	0	掃除 (1) 部屋の掃除
	女	19.6	17.6	17.6	22.0	16.8	0	(2) 庭の掃除
農	男	14.4	20.6	15.6	12.2	9.4	5.5	(3) 雑巾がけ
	女	33.2	18.3	34.3	19.4	23.3	3.5	

第VII表 家庭での勉強時間 (初6, 平日% 桐原・依田)

		す る	し な い	30/ 未 滿	30/ 60	60/ 120	2° 3	3° 4	4° 5	5° 以上
都	男	88.5	10.6	6.9	25.3	36.8	12.4	6.0	1.4	1.0
	女	92.4	3.8	8.8	31.5	39.5	13.0	3.8	0	0
農	男	76.3	23.8	53.8	32.7	11.9	1.9	0	0	0
	女	88.7	11.4	42.5	33.7	15.6	3.1	0	0	0

多くの疑點を残す餘地のあることを留意しなければならぬ。この調査に於ては、都市に於ける勉強時間の四〇%が一時間乃至二時間であるに反し、農村に於ては四〇―五〇%が三〇分未満であることを示した。

東京府社會教育課の調査では前日行つた手傳いの種類があげられているが、都市の山手と下町とは掃除、お使い、食事の手傳いなど家事の手傳が主となつて居るが、農村に於てはこれらの他に家業の手傳いが極めて多く擧げられている。これは前述日本女子大學兒童研究所の調査に見られたと同様、多く農事に關するものであるが、手傳いとはいへ農村兒童の勤勞が直接生業に關與し援助する生産的な性質を帯びるものであることを示している。

倍、如上の諸調査は、何れも兒童殊に學童

する試みである。學童生活の實態を知ることとはそれだけで十分検討すべき一つの問題であるが、實態調査としては、そのサンプリングに於て多くの不備を有し、且特定の或一日に限つての調査が、どれだけ「實態」を示すものであるかについては、多くの人に不信の目を以て迎えられるのも當然であると言いうるであろう。われわれは暫く斯る調査の教育心理學的意義を検討し、問題の所在を明らかにしたいと思う。

學習の生活化、生活の學習化は、現代の教育の基本的要請の一つであると考えられる。併し、生活とは何ぞや、生活化とは何ぞや、は極めて困難な問題である。今日、生活學習と銘うつて提唱される二、三の教育法の試みも、「生活」と云う概念が極めて卑近でもあり又包括的でもあり、それが兒童の實際に生活する生活環境から抽象され易いために、却て環境から遊離し非生活的なものに陥りがちな危険も伴つてゐる。多くの生活學習は、兒童の生活環境に即した自發的興味を中心とし、兒童相互の集團的交渉による知識や經驗の交換検討を主體とし、生活經驗自體から來る社會的諸規制の内面化を目標としているようである。併し、教育者が兒童を指導教育する場合、最も意識的に批判調整しなければならぬのは、兒童生活それ自身が規制せられてゐるこの社會的諸規制でなければならぬと考えられる。環境の子である兒童に、環境克服の意欲を揮掉せしめ、より合理的にしてより價值的な環境の形成へと發展せしめることを理念としてもつべきであらうと考えられる。教師が斯様な理念を忘れない限り、教師の最大關心事の一つは常に兒童生活を規制する環境の特性、或意味に於ては歪みを知悉することにあるといつて差支えない。兒童の生活を環境に即して把握すると共に、又その環境的な制約を比較考案して、その特異な偏りを理解し、それが心理の發展に對してもつ關係を考究することが必要である。學童生活の時間分布に關する問題も、それがただ實態調査としての意味のみならず、環境的規制が如何に兒童の生活に働き、それが兒童の心性發展を如何に規定するかと云う問題の觀點からみると、特に教育心理學や發達心理學上關心がもたれるのである。

兒童生活を規制する環境の特性に於て、自然的環境のもつ役割は勿論重視されなければならない。併しもつと直接的に、殊に心的生活に關與するものは、それら自然的環境が人間生活にとりいれられ、社會的生活環境として働く場合である事は論を俟たない。成人の生活を規制する社會的規制は、成人の生活様式そのものに於て、或は成人が兒童のために設定する兒童の生活環境として、或はその要求を通じて兒童に對する禁止容認賞讃等の社會的條件として、兒童の生活環境を規制する。これらの諸規制は兒童の行動に於て内面化し、兒童自らの要求を方向づけ、更には兒童自身の要求となつてくる。兒童生活の時間的分配という極めて形式的な面に於てさえも、そこに環境的な特性を見出すことができるならば、これを通じて夫々の環境に於ける兒童生活の社會的環境を分析する資料とすることが出来る。

兒童生活の時間的分配は、新生兒及乳兒期については、信賴すべき綿密な持續觀察による二、三の研究があるが、年齢の長ずるに伴い、斯様な觀察法による資料蒐集は極めて困難となる。嬰兒期の生活経過が比較的觀察に便であり、且代表的信賴度の高い理由は、その活動が殆んど自然的要求に基き、行動としての活動領域が少ないのみならず、環境の社會的諸規制による偏差が比較的少ないことにある。長ずると共に、その活動領域も多様となり、時間量の偏差も著しくなつてくる。この偏差のすべてが環境的要因に歸せらるべきではないにしても、生活の社會的規制が自ら活動の或る領域を制限し、或は強制し、その時間的分配を左右する重要な要因であることは疑い得ない。従てわれわれは、兒童の生活時間の分配に於て、環境的特徴が認められるならば、一應それによつて、環境の社會的規制の特徴を比較しようと期待してよいと考えられる。

學童の生活に於て、最も社會的規制の著しいのは學校生活である。併し今日の學制に於ては、この時間量は比較的環境的差異なく略一定されている。睡眠其他生理的生活に必要な時間も勿論ある程度の環境的相違はあるにしても、比較的常同性を示すものであることは、上記の諸調査に於ても、これを見ることが出来る。而もこれらの時間は合せて學童の生活

時間の略七〇—八〇%を占めるのであるから、其他の活動の時間量に現れる環境的差異は、生活全體から見れば極めて僅少な變化である。従て屢々問題になる兒童の知能、學業、性格、人格等の環境差が、この僅かな時間量の差に直接關聯すると考へるのは餘りに輕率に過ぎるであらう。兒童心性に及ぼす環境の働きは、寧ろその生活内容、活動場面の構造にあるのであつて、時間の多少の長短は問う所でないとも考へられよう。われわれは嘗て京都市内の或小學校兒童について家庭學習の狀況と學業成績との關係を調査したが、家庭に於ける學習時間は平均に於て學業成績の悪い者程少ない傾向をみたが、更により著しい相違は學習の仕方⁽³⁾に存することを明らかにした。前記諸調査に於ても、都市特に山手の兒童は農村や下町兒童に比して勉強時間の多いことを示しているが、このことが直ちに前者が後者より一般に學業成績の優良なものが多い原因と考へられるかどうかは疑問である。殊に農村兒童は一般に勤勞生活(手傳)の多いことが勉強時間を少なくし、これが學業成績に關係する原因であるとは簡單に考へられぬであらう。青少年教育研究所の調査では、同じく手傳時間の少ない都市下町の兒童が勉強時間必ずしも多くないことを示し、又平均的にいつて勉強時間の多い女子が必ずしも男子より學業成績がよいともいえぬのである。勿論勉強時間と學業成績との間に全然關係がないとはいえないけれども、生活時間分配の若干の相異が果して心性能力の環境的相違を生ずる原因として考へられうるか否かは大いに疑問の存する所である。

併しながら、生理的必要や學校生活を除いた残りの斯様な生活時間の分配には、最も著しく環境の特徴が反映するであらう。これらの時間は主として家事手傳、學習、遊び、團樂等に分配されるのであるが、大人が兒童の手傳を要求するところが多ければその時間に比重が強く、學校或は家庭の學習要求が強ければ家庭での勉強時間も多く、斯ることが少なれば自由な遊び時間が多くなるであらう。そして一日に於ては僅かその二〇%前後に過ぎない時間の分配に表われる斯様な環境的要求の相違は、單にこの時間的分配のみを支配するのではなく、常に兒童の生活全體を規制する環境的特色をなし、

又一日に於ける時間量の僅かな差異も累積すれば少なからぬ影響を児童の心性發達の上に齎らざないとはいえない。

以上の觀點に基づいてわれわれは、児童の生活時間の分配に關する研究は、(一)或地方に於ける児童生活の實態を明らかにする目的と同時に、(二)これによつて現わされる環境的特性を比較研究することを目的とし、更に進んでは、(三)直接には斯る時間的分配の相違が、間接には斯る相違に現われている環境的特性が、心性發達の上に如何に關與するかを攻究する課題をもつものと考える。從て斯る研究に於ては、出来るだけ特徴的な環境をもつ地域の比較が中心の問題となる。同時に統計的比較としては、これらの地域環境ができるだけ代表見本としての諸條件を具えていることが望まれる。前述した既往の諸研究に於ては、主として比較が大都市(東京都)と農村とに限定されて居るのみならず、見本抽出の方法に於ても餘りに無雜作に過ぎてゐる。更に文化的習俗に於て相當隔りのある地域が比較されているので、これが農村の特徴なのであるか、文化的教育的氣候の相違なのであるかについても、問題とすれば問題が残りうる餘地がある。

そこでわれわれは、一つには戦前の諸調査との比較の意味もあり、二つには京都府學童の實態調査を兼ねて、比較的文化的教育的氣候に於ては隔りの少ない同一行政管内にありながら、大都市中都市小都市を包含し、且比較的典型的な農村山村漁村を多く含んでいる京都府の學童について、その生活時間分配の狀況を比較し、如上の問題に關する資料の蒐集を試みたのである。

本調査の目的は、京都府下の小學校六學年兒童約三六、〇〇〇名について、一日(週日)の生活時間の布置を調査し、その代表見本につき、

一、之を性別、環境別に比較する。この場合環境とは、京都市内にありては、學校所在地の全般的特徴により、中心商業地區、工業地區、知識人地區、貧困スラム地區、に別け、京都府下にありては、同じく學校所在地の特徴により、都市、農村、山村、漁村に別ける。

二、知能及び學業成績別に比較する。この場合、知能は、同時に施行した京大A式團體知能検査の結果により、學業成績は、各受持教師の判定による優良可の別に従うこととした。

- (1) 日本青少年教育研究所 兒童生活の實態 昭和十八年。
- (2) 日本女子大學兒童研究所 兒童の生活實態 兒童心理一ノ七 昭和二十二年。
- (3) Goldberg, R. and Prosesey, L. C. How do children spend their time? *Elementary School Journal* 1928—1929, 29, 273—276
- (4) 教育研究同志會 學童の生活調査 昭和十七年。
- (5) 東京府社會教育課 少國民生活調査報告 昭和十八年。
- (6) Bühler, Ch. und Heizer, H. Inventar der Verhaltensweisen des ersten Lebensjahres. *Quell. u. Stud. z. Jugendkunde*, Heft 5, 1927
- (7) 園原太郎 生後十日間の新生兒の行動觀察 實驗心理學研究三ノ二 昭和十一年。
- (8) 守屋光雄 乳幼兒心理學入門 昭和二十六年。
- (9) 園原太郎 小學校兒童の家庭學習に關する調査 教育七ノ八 昭和十四年。

二、調査方法

一、調査用紙 別表1参照。調査は、學校に於ける社會科學習の一部として行なう主旨をとり、附表の如き午前四時より午後十一時に至る間を十五分毎に區劃した記入用紙を作成し、兒童各自に記入させる方針をとつた。

二、調査打合會 京大大學心理學研究室、京都府學務課、都市郡部小學校側代表、計二〇名によつて、昭和二十二年九月二日、京大心理學教室に於て、實施に關する打合會を行なつた。

三、調査法解説協議會 昭和二十二年十月六日より三十日に至る間に、十五日に亘り府下各地區を巡回し、京都府管下の小學校六學年擔任教官（各學校一名以上）を行政管區毎の會場を集め、本調査に關する講習、打合、協議を行つた。この準備には京都府學務課の盡大の援助をうけ京都府地方事務所學務課の手によつて、支障なく行なうことができた。開催地は第Ⅷ表の如くである。

その際の講師は左の各々が一定の組合せをもつて順次之に當つた。（職名は當時のもの）

京都大學教授文學部長 本田 義英

教授 矢田部 達郎

助教授 園原 太郎

助手 大西 憲明

嘱託 住田 勝美

京都府學務課長 天野 利武

他 五視學

四、調査實施 各教官はこの講習によつて知能検査法及び實態調

査法を習得したわけで、その後學校行事及び地方の特殊事情を考慮して、昭和二十二年十一月中に適當なる時期を任意に定めて各自實施して貰つた。この結果、調査用紙は地方事務所又は學區當番校に單位毎に集められ學務課を経て大學研究室に回送された。調査上の

留意すべき點は別表Ⅱの注意書の示す通りである。

五、調査對象 上述の通り京都府下小學校六學年兒童全員に就いて調査した。各兒童の居住地域による一覽表は第Ⅸ表の通りである。

六、結果の整理法 (a)回収率、かくして實施した各小學校は大學に調査用紙を返還してきたのであるがこの回収率は極めて悪く、屢々督促しなければならぬ状態であつた。之は(1)調査兒童數が多數であり、(2)且つ調査地域が京都府全般に亘つていたため連絡がとりにくかつたこと、(3)郡部は農繁期に當り從て正常な生活時間を捉えるためには、實施を延期し

第Ⅶ表 協議會開催地

期 日	地 區 別	會 場	初6學童數	學校數
昭和23年 10月6日	舞鶴市	新舞鶴小學校	1,738	21
〃 7日	與謝津宮	宮津小學校	1,852	31
〃 8日	與丹	網野小學校	2,031	37
〃 10日	天田	惇風小學校	1,293	25
〃 10日	福知山	〃	786	5
〃 11日	何鹿	綾部小學校	1,271	14
〃 14日	船井	園部小學校	1,479	21
〃 15日	南桑田	龜岡小學校	1,066	18
〃 21日	北桑田	周山小學校	558	13
〃 23日	宇治	田邊小學校	1,191	13
〃 23日	綴喜	〃	1,130	14
〃 24日	相樂	木津小學校	1,207	17
〃 28日	北山	明德小學校	1,083	19
〃 29日	京都市	明倫小學校	19,857	134
〃 30日	〃	〃	〃	〃

なければならなかつたし都市では秋季の學校行事が多かつた、(4)且つ冬季休業に入つたり、(5)教員組合の運動、(6)教員の轉勤等、實施及びその結果の集計に支障を來す幾多の條件があつた。然し度々の督促によつて昭和二十三年十一月までにまとめた數は第IX表の通りである。回収率は平均六一%であつた。

第IX表 調査數及び回收狀況

	調 査		回 收		百 分 率	
	學校數	兒童數	學校數	兒童數	學校數に對して	兒童數に對して
京 都 市	134	19,857人	97	11,780人	72%	59%
福 知 山 市	5	786	0	0	0	0
舞 鶴 市	21	1,738	20	1,555	95	89
喜 喜 郡	14	1,130	13	900	92	79
相 樂 郡	17	1,207	0	0	0	0
南 桑 田 郡	18	1,066	18	1,000	100	99
北 桑 田 郡	13	558	11	424	84	78
船 井 郡	21	1,479	15	868	71	58
何 鹿 郡	14	1,271	13	1,033	92	81
愛 宕 郡	9	244	9	226	100	92
乙 訓 郡	8	681	8	623	100	91
葛 野 郡	2	157	2	37	100	23
宇 治 郡	3	215	2	82	66	38
久 世 郡	10	922	1	58	10	6
天 田 郡	18	916	1	37	5	4
加 佐 郡	14	592	7	287	50	48
與 謝 郡	24	1,459	24	1,383	100	94
中 郡	13	590	13	587	100	100
竹 野 郡	16	894	15	807	94	94
熊 野 郡	8	468	8	431	100	91
計	382	36,230	277	22,128	72	61

(b) 移記について、各兒童の記入した用紙を整理カード(別表III)に移記して統計的處理を行うことにした。その際の手續は注意書の示すように次の通りである。

(1) 兒童が一日の生活の各項目の下に時間經過と共に記録したものを一時間四單位とし(一單位十五分)換算して移記した。

(2) 十五分の中に記録された○印は大小に拘らず一單位としたが同一時間に異種項目の記入がある場合があつたので當然その單位の合計は75(15×5)を越えるものがあつた。そこで食事、大便、學校の授業時間等は比較的個人差が少な

いものともて學級の一般的傾向に修正し、尙合計が七十六に足りない場合には不足數を最後の項目の「何もしない」に移して加えた。七十六單位以上の場合は前述の項目について數を減じ全般の布置狀況を見通して大體七十六に近似した數値になる様に訂正した。かかる人爲的修正は整理に極めて重要な意味をもち、結果の信頼度に著しい關係を示すものである

ので慎重に成るべく客觀的態度に於て行つたつもりである。併しこの修正は府下のものみに止め、京都市内の分では修正を施さなかつた。

(3)このカードへの移記は三名の研究補助員及び可成り多數のアルバイト學生によつて行われたが、各兒童の表には記録の極めて不明瞭なものがあつて、その決定に迷う場合が少なくなかつた。従て抽出整理を行う場合には、なるべく斯る不確定記録の含まれるのを省くことをも考慮に入れざるを得なかつた。斯る困難は(1)生活時間記入の方法が兒童に煩雜にすぎた點、従て智能の低い者には記入が困難であり、智能の良き者には自己の生活経過を表象するのに取捨の困難を覺えしめた。(2)教師の指導の如何によつて著しく異なる點、従て或學校ではかなり一齊に詳細な正確な記入が得られ或學校では殆んど正確な記入が得られなかつたことにある。従て今後この種の調査には初めから見本校を嚴選し、學校側の協力の下に十分調査方法を吟味徹底せしめるの要あることを痛感した。

七、抽出整理 本調査の主要なる目的は環境の特性による比較である。従て先づ調査人員すべてについてその職業を調べ、これによつてその所屬する學校の特徴を定め、然る後に之を一定の規準に基き層化見本を抽出することが望ましい。併し調査人員すべてについて、これを整理することは到底その煩に堪え得ないことであり整理カードへの移記のみにても容易に完了し得ないものであるので、われわれはこの方法を斷念せざるを得なかつた。のみならず各學校の所在地の環境的特徴を示す如き職業靜態の統計資料は極力これを求めたのであるが、斯る統計は未だ行われて居らず、遂に之を得ることが出来なかつたので、これについて大體の傾向を知つてゐる府立教育研究所、地方事務所等の意見を參酌し、且調査票に教師によつて記入された學校所在地の環境特徴を照合し、回答を寄越した各學校を、都市、農村、山村、漁村、商業地、工業地、住宅地の各々に分類した。併し多くのものではこれらが、半農半山、半農半漁、半商半住等の如く重複し、従て標本設計が困難であり、而もこれらの中には前述の如く、記入不備のものも少なからず、任意抽出はこの枠に於ては却て

第 X 表 京都府下代表見本として選擇せる調査對象

種類	校名	男子數	女子數	合計	男合計	女合計	合計	
都市	龜岡	91	78	169	490 (439)	419 (388)	909 (827)	
	綾部	146	130	276				
	宮津	72	60	132				
	八幡山	105	85	190				
農村	草内	13	23	36	154 (149)	129 (120)	283 (269)	
	神足	53	17	70				
	三木	24	22	46				
	井手	40	45	85				
	都々城	24	22	46				
山村	宇治	46	24	70	160 (152)	160 (159)	320 (311)	
	三岳	20	17	37				
	鶴岡	19	21	40				
	西別院	15	16	31				
	畑野	5	11	16				
	宇津	12	7	19				
	山國	22	32	54				
知井	21	32	53					
漁村	神崎	9	12	21	160 (153)	145 (136)	305 (289)	
	山良	30	27	57				
	湊	22	27	49				
	下字川	16	13	29				
	間人	45	45	90				
	伊根	38	21	59	合計	964	853	1,817

() は知能及び學業成績結果記入不備のものを除きたる數

第 M 表 京都市内の代表見本

	校名	男	女		男	女	
商業地區	SS	18	23	知識人地區	KR	23	33
	ST	42	38		KS	52	59
	NJ	17	24		KG	58	60
	OG	49	54		計	133	152
	TE	49	33				(125)
	計	175	172	貧困地區	S	67	71
			(169)		T	42	34
工業地區	ST	78	85		R	25	25
	SZ	82	86		計	134	130
	計	160	171		(109)	(105)	

() 内は記入不備のものを除きたる整理數

のに基づき、これに類似環境の學校若干

は無意味なることが明らかになつた。そこでわれわれは、現在に於ては確率的合理性は保證されなくても、環境的特性を却て代表するものとして、有意選出法によることとした。即ち、前記の分類に於て、府下に於ては純粹に農村、山村、漁村として分類されたものを各地區から任意に抽出し、児童數の合計が約三〇〇になるように選び、これに地方都市乃至小都市と認められる町の代表校のうちから児童數合計約一〇〇〇になるように選んだ。かくして選ばれた學校及び児童數は第 X 表の如くである。京都市内については事情は更に複雑であり、學校を抽出單位とする任意抽出は殆んどその意味を失うので、ここも有意選出法によることとし、その選出基準はさきに知能と環境との關係について研究せる場合設定したも

を加えて第Ⅹ表の如く決定した。

- (10) 園原太郎、田寺篤雄 環境と知能とについて 全国都市問題會議第五
回總會文獻都市の公益事業都市の保健施設、昭和十一年。

第二章 生活時間の環境差

一、生活時間量の平均

生活時間の分配を各活動項目の平均によつて示すことは、從來一般に行われてきたことであるけれども、その分散が廣く且不規則なものが多いため、どれだけ信頼できるかは疑問である。(標準偏差は、生活必要時間、學校生活時間を除いた他のものでは、何れも略平均値に匹敵した。)併し従前の研究と比較する意味もあり、又一應の中心傾向の示標として、算出した生活時間平均、並びにその一日二十四時間に對する百分率を示せば第一、第二、第三表である。

これによれば京都府下代表群の總平均(第一表)に於て小學六年の學童は調査時期の週日一日二十四時間を、生活の必要(睡眠・排泄・食事・入浴・其他)五〇%、家事の手傳に七%、學校生活(通學時間を含む)に二八・五%、家での勉強に二・六%、家での遊びに五・七%、家での團欒娛樂に二・五%の割に費し、この他に何もしないという時間が三・二%ある。京都市内學童では生活必要五〇%、手傳五・五%、學校生活二七%、家での勉強二・八%、家での遊び七%、團欒三%、何もしない及び不明合せて約四%の割で、郡部に比し殆ど著しい差を見ない。唯平均値の上で手傳い、學校生活の時間が稍少なく、睡眠、勉強、團欒が稍多い。(第一表)

(睡眠時間及學校生活時間)

斯く學童一日の生活の約八〇%は睡眠、食事の生活に必要な時間と學校生活の時間によつて占められることは、從來の諸調査と同様であるが本調査の結果に於ては之には顯著な男女差や環境差は認められない。唯女子は男子より幾分睡眠時間が短かい。(第二表)

第1表 學童の生活時間總平均

内 項 目	京都市平均				京都府下郡部平均				京都市	
	男		女		男		女		男	女
	時間	%	時間	%	時間	%	時間	%	%	%
生活の必要	12° 7'	50.5	11° 52'	49.5	11° 55'	49.6	11° 40'	48.6	49.9	49.4
内 睡眠	10° 25'		10° 9'		10°		9° 45'			
手 傳	1° 8'	4.72	1° 33'	6.45	1° 35'	6.6	1° 55'	8.0	4.98	7.90
學校生活	6° 16.5'	26.2	6° 37.5'	27.6	6° 50'	28.5'	6° 50'	28.5	29.6	29.3
内 登校下校	34.5'		40.5'		50'		53'			
學習	3° 10.5'		4° 4.5'		4° 11'		4° 11'			
遊び	1° 30'		1° 19.5'		1° 18'		1° 12'			
其他	31.5'		33'		31'		39'			
家での勉強	50'	3.47	60'	4.16	36'	2.5	44'	3.06	4.35	3.93
内 豫習復習	39'		49.5'		28'		37'			
(宿題)其他	11'		10.5'		7'		7'			
家での遊び	1° 50'	7.65	1° 35'	6.66	1° 48'	7.5	1° 16'	5.28	7.81	4.86
内 外 で	48'		24'		52'		30'			
内 で	27'		24'		33'		26'			
讀書	25.5'		24'		17.5'		15.5'			
其他	10'		22.5'		6.5'		6'			
比 { 内/外	0.56'		1.00'		0.64'		0.87'		0.68	1.12
内/全	0.25'		0.25'		0.31'		0.40'		0.46	0.39
讀/全	0.23'		0.25'		0.16'		0.20'		0.17	0.20
團 ら ん	42'	2.92'	43.5'	3.02	33'	2.29	37'	2.57	1.99	2.61
内 お話	19.5'		22.5'		20'		24'			
ラジオ新聞	19.5'		18'		10.5'		10.5			
映畫	3'		3'		2'		2.5'			
何もしない	18'	1.25	18'	1.25	44'	3.06	46'	3.2	2.4	2.19
不 明	48'	3.33	39'	2.71						

從來の諸調査、例えば前記日本青少年教育研究所のそれに於ても、農村は都市（大都市）兒童に比し一般に睡眠時間が短い傾向を示したが、本調査に於ては然く著しい差を見ることは出来なかつた。但京都市の工業地區及貧困地區が他に比し男女平均に於て三〇分前後睡眠時間が長い傾向を示したが、商業地區や知識人地區は郡部兒童と何等相違を示していない。睡眠時間に於ける男女の差は、漁村、農村及都市貧困地區が比較的大きい。

學校生活時間は一般に市

第2表 京都府下學童環境別生活時間平均

内 項 目	男								女							
	都 市		農 村		山 村		漁 村		都 市		農 村		山 村		漁 村	
生活必要	717.3	49.7	730.0	50.7	686.6	47.7	730.7	50.8	710.2	49.4	678.1	47.1	689.4	47.8	691.5	48
睡眠	603		607.0		588.5		622.5		601.5		585		581		580	
手 傳	72	5.0	82.5	5.7	102	7.0	70.5	4.9	114	7.9	116	8.0	120	8.3	112.5	7.8
學校生活	412.5	28.6	382.5	26.6	444	30.9	442.5	30.7	420	29.3	396	28	447	31	441	31
登校下校	42		33		51		48		48		36		67.5		52.5	
學 習	252		240		273		283		249		244		261		285	
遊 び	87		76.5		88.5		84.5		79.5		73		76.5		67.5	
其 の 他	31.5		33		31.5		27		43.5		43		42		36	
家での勉強	62	4.3	42	2.9	25.0	1.7	23.0	1.6	56.7	3.9	54.4	3.8	34.2	2.3	33.0	2.3
復習練習宿題	58.0		36		24		21		51		34		30		23	
其 の 他	4.05		6		1.0		20		5.7		19		4.2		10	
家での遊び	112	7.8	115	8.0	97	6.8	117	8.1	70	4.8	70	4.8	71	4.9	80	5.5
外で	51		70		42		58.5		24		22.5		24		30	
内で	34.5		21		30		31.5		27		25.5		22.5		25.5	
讀書	19.5		15		15		24		13		19		19.5		21	
其他	7.5		9.0		10.0		3		6		3.0		5.0		3.5	
内/外	0.68		0.3		0.72		0.54		1.12		1.13		0.94		0.85	
内/全	0.46		0.18		0.31		0.27		0.39		0.37		0.32		0.37	
比 讀書/全	0.17		0.13		0.15		0.20		0.20		0.27		0.28		0.26	
團らん	28.7	2.0	36.6	2.5	37.5	2.6	21.9	1.5	37.5	2.6	45.8	3.2	36	2.5	30	2.1
お 話	18		19.5		21		13.5		22.5		30		22.5		22.5	
ラジオ新聞	10.5		16.5		12		7.5		9		15		10.5		7.5	
映 畫	0.15		0.6		4.5		0.9		6		0.8		3		0	
何しもない	22.5	2.3	52.5	3.6	49.5	3.4	34.5	2.5	31.5	2.2	33.5	2.3	42	2.9	52	3.5

部より郡部の方が稍多いが特に山村、漁村では長い傾向を見た。併し、これには通學時間が他よりも稍長いことが加つてゐる。市内商業地區男子は他に比べて約一時間學校生活が長くなつてゐるが、これは放課後の遊びや學校の所用時間が多いため、この環境の特殊事情を物語つてゐるといえよう。

(第二表、第三表)

(手傳、勉強、遊び時間の分配)

學童生活の主なる時間的變化は、残り二〇%の中に於ける家事の手傳い、家庭での學習、家での遊びの配布如何にあることは前述した通りである。

1、男女差、一般に女子は男子に比して、手傳い、學習の時間が

第3表 京都市内児童環境別生活時間平均

内 訳 項 目	男								女							
	商業地区		知識人地区		工業地区		貧困地区		商業地区		知識人地区		工業地区		貧困地区	
	分	%	分	%	分	%	分	%	分	%	分	%	分	%	分	%
生活必要	715	49.6 (49.8)	714	49.5 (50.5)	729	50.5 (49.6)	747	51.8 (53.5)	699	48.5 (49.5)	701	48.7 (48.3)	715	49.6 (48)	735	5.1 (5.08)
内 睡眠	609		616.5		631.5		649.5		595		598.5		624		618	
手 傳	43	2.9 (3.0)	77.5	5.4 (5.5)	78	5.41 (5.31)	61.5	4.3 (4.4)	81	5.61 (5.7)	93.5	6.49 (6.45)	96	6.66 (6.5)	102	7.08 (7.04)
學校生活	453.5	31.5 (31.7)	376.5	26.1 (26.6)	342	23.8 (23.3)	349	24.2 (25.2)	407	28.3 (29.5)	399	27.7 (27.5)	370	25.7 (24.9)	384	26.7 (26.6)
内 登校下校	25.5		36		40.5		19.5		36		42		39		46.5	
内 學 習	273.5		240		202.5		226.5		242		253.5		208.5		241.5	
遊 び	114		69.5		72		76.0		84		70.5		94		69	
其 他	40.5		31		27		27		45		33		28.5		27	
家での勉強	63	4.38 (4.38)	47	3.3 (3.3)	46.5	3.23 (3.17)	28.5	2.0 (2.0)	75.5	5.2 (5.3)	78	5.41 (5.38)	52.5	3.65 (3.5)	24.5	1.7 (1.7)
内 豫習復習宿題	48		42		33		21.5		65.5		69		39		21	
其 他	15		5		13.5		7		10		9		13.5		3.5	
家での遊び	61.5	4.27 (4.28)	102	7.1 (7.2)	142.5	10 (9.7)	133.5	9.3 (9.6)	69	4.8 (4.9)	75	5.2 (5.18)	99	6.9 (6.7)	94.5	6.6 (6.6)
内 外 で	18		42		72		60		10.5		21		33		30	
内 で	19.5		27		33		28.5		19.5		18		33		25.5	
読 書	18		27		22.5		34.5		22.5		22.5		21		28.5	
其 他	6		6		15		10.5		16.5		13.5		12		10.5	
内/外	1.08		0.65		0.46		0.48		1.86		0.86		1.00		0.85	
内/全	0.32		0.26		0.23		0.21		0.28		0.24		0.33		0.29	
比 読/全	0.29		0.26		0.16		0.26		0.33		0.3		0.21		0.3	
團 ら ん	42	2.92 (2.92)	46.5	3.2 (3.3)	51	3.54 (3.48)	30	2.1 (2.2)	45	3.12 (3.2)	51	3.54 (3.52)	60	4.2 (4.0)	31	2.2 (2.1)
内 お 話	19.5		21		24		15		21		27		31.5		19.5	
ラ ジ オ 新 聞	19.5		22.5		21		13.5		22.5		21		19.5		10.5	
映 畫	3		3		6		1.5		1.5		3		9		1	
何もしない	16.5	1.15 (1.15)	18	1.27 (1.3)	18	1.25 (1.23)	19.5	1.4 (1.4)	9	0.63 (0.64)	33	2.29 (2.28)	15	1.0 (1.0)	18	1.3 (1.3)
不 明	36	2.5 (2.5)	37.5	2.6 (2.6)	61.5	4.27 (4.2)	33.0	2.3 (2.4)	23.0	2.00 (2.00)	19.5	1.35 (1.35)	81	5.6 (5.5)	51.5	3.9 (3.9)

備考
 () 内の数字はこの統計に對しての率であり、() 内の数字は京都市内の分の統計に對しての率であり、() 内の数字は24時間に對しての率である。
 () 内の数字は24時間に對しての率である。

多く、遊び時間が少いという傾向にあり、かような男女差は、漁村、農村の方が大きく、山村では最も少ない。即ち、山村では他の環境に比し男子が女子に劣らず長く手傳いし、長く勉強し、従つて遊ぶ時間が少ないが、山村に於けるこの男女差の少いことは上述睡眠に於ても認められた所であり、山村児童生活の一特徴とみることが出来る。これに反し漁村、農村及び都市貧困地域では、男子は女子に比べて手傳い、勉強の長さが短かく、遊ぶ時間が倍近く多い。これら三地區に於ける男女差の大きなことは睡眠についてもいえたことである。町都市では、手傳い時間、遊び時間の男女差はかなり大きい。勉強時間には大きな差異がない。京都市内の他の地區の児童も同様の男女差の傾向をみせるが、その差は郡部各環境程大きくない。即ち、女子の手傳時間が郡部より少く遊びの時間が多い。(第二表、第三表)

2 環境差 環境による一般的な相異としては、先づ郡部だけでいえば、町都市は手傳が少なく學習が多く、山村は之に比し、手傳が三割近く多く、勉強時間、遊び時間が少ないが、このような環境的差異は女子よりも男子の方に著しい。農村は町都市、漁村より手傳時間が遙かに多く、山村のそれに匹敵するが、遊び時間には變りなく、又勉強時間もそれ程短くはない。農村に於けるこの手傳時間の超過は、睡眠時間の稍少ないことと、通學時間を含めて學校生活時間の稍短いこととによつて相補われているようである。漁村は調査時期の故かも知れないが、手傳時間が短く町都市並みであるが、町都市・農村に比して遊び時間が多く、勉強時間は短かく山村並みである。而してこの様な環境による相異は、この場合も亦女子は男子に比べて著しくない。

京都市内児童は一般に郡部児童よりも手傳時間の平均は少ない傾向にあるが、環境地區による相異は、ここでも男子の方が女子より遙かに著しい。商業地區男子は特に手傳時間が少ないが、貧困地區では女子が他の環境より比較的多いのに對し、男子は割合少なく、商業地區と共に男女差が著しい。

3、相對比 家事手傳、學習、遊びの時間分配に見られる以上のような環境差は平均時間の絶對値でみれば僅々三〇分

内外のすれに過ぎない、併し之を各々の比重に於てみる時は、相當著しい相異として考えられなければならない。家での勉強時間を1とし、家事手傳、遊びの時間の之に對する比率を示したのが第四表であるが、勉強時間に對する遊び時間の

第4表 家での勉強時間に對する家事手傳、遊び時間の比

環境別	性別	活動別	男			女		
			勉強	手傳	遊び	勉強	手傳	遊び
京都市府下	地域別	平均	1	2.64	3.00	1	2.61	1.73
		都	1	1.16	1.80	1	2.01	1.23
		農	1	1.97	2.34	1	2.13	1.28
		山	1	4.08	3.95	1	3.23	1.85
		漁	1	3.07	5.09	1	3.41	2.42
京都市内	地域別	平均	1	1.36	2.20	1	1.55	1.58
		商	1	0.68	0.97	1	1.07	0.91
		知	1	1.65	2.17	1	1.20	0.96
		工	1	1.68	3.07	1	1.83	1.89
		貧	1	2.15	4.70	1	4.15	3.86

比は府下男子では、都、農、山、漁の順に約2、2.5、4、5、市内男子では商、知、工、貧の順に、1、2、3、5、の割となり、遊び時間の占める相対的な割合が環境差によつて極めて異なることが知られる。同様に勉強時間に對する手傳の比は、右の順に於て府下ではそれぞれ、1、2、4、3、市内では0.5、1.5、1.5、2.0、となり、山村、漁村及び市内貧困地域の手傳の比重の大きなことが知られる。女子に就ても同様、山村、漁村、貧困地區に於ける、勉強時間に對する手傳や遊びの比重が他の環境よりも大なることが知られるが、この場合は、絶対値に於ても見られた如く、男子に比して、それ程著しい環境差は認め

られない。但、市内貧困地域のみはこの比が手傳、遊びとも四倍に達し、著しい特徴を示している。一般にわれわれは田舎の兒童は都會の兒童より、貧困地域の兒童は商業地區や住宅地區の兒童より、家庭での學習生活が手傳や遊びに對して著しく少ないという通念をもっているが、これはその時間の絶対量よりも、相互の間の比重に基づいた觀念であるという事が出来るのであらう。同時に又山村、漁村、貧困地區に見られる如く勉強時間に對して手傳の比重の大なる所では遊び時間も等しく比重大であることは、從來とかく常識的に手傳の多いことが勉強時間や遊び時間を少なくさせる如く考えられがちであつた通念を訂正して、これらでは勉強に對する要求の少ないことが考えられなければならぬようである。

第5表 家事手傳内容別

性	男								女								
	都 市		農 村		山 村		漁 村		都 市		農 村		山 村		漁 村		
環 境	分	%	分	%	分	%	分	%	分	%	分	%	分	%	分	%	
京 都 府 下	掃 除	15	20.8	12	14.6	13.5	13.2	15	21.3	37.5	32.9	31	26.8	25.5	21.2	25.5	22.6
	使 い	12	16.7	15	18.2	13.5	13.2	15	21.3	16.5	14.5	21	18.1	13.5	11.3	12	10.7
	畑 事	9	12.5	19.5	23.6	24	23.6	7.5	10.6	4.5	3.9	21	18.1	19.5	16.2	9	8.0
	子 守	10.5	14.6	10.5	12.7	18	17.6	9	12.8	18	15.8	27	23.2	28.5	23.8	15	13.3
	其 の 他	25.5	35.4	25.5	30.9	33	32.4	24	34	37.5	32.9	16	13.8	33	27.5	51	45.4
計	72	100.0	82.5	100.0	102	100.0	70.5	100.0	114	100.0	116	100.0	120	100.0	112.5	100.0	
京 都 市 内	環 境	商 業 地		知 識 人 地		工 業 地		貧 困 地		商 業 地		知 識 人 地		工 業 地		貧 困 地	
		分	%	分	%	分	%	分	%	分	%	分	%	分	%	分	%
	掃 除	13.5	31.4	35.5	45.9	18	23.1	9	14.6	25.5	31.5	25.5	27.3	30	31.2	24	23.6
	使 い	13.5	31.4	15	19.4	22.5	28.8	16.5	26.8	21	25.9	19.5	20.9	31	21.9	24	23.6
	畑 事	1	2.3	1.5	1.9	3	3.8	3	4.9	1.5	1.9	0.5	0.5	3	3.1	3	2.9
子 守	3	7.0	9	11.5	10.5	13.5	10.5	17.1	9	11.1	12	12.8	18	18.8	16.5	16.1	
其 の 他	12	27.9	16.5	21.3	24	30.8	22.5	36.6	24	29.6	36	38.5	24	25.0	34.5	33.8	
計	43	100.0	77.5	100.0	78	100.0	61.5	100.0	81	100.0	93.5	100.0	96	100.0	102	100.0	

(手傳の内容) 手傳時間を手傳の内容によつて細分すれば第五表の如くである。その傾向は各環境並びに男女の差によりかなり區々であるが、郡部児童は市内児童より畑仕事及び子守りに重みが置かれ、市内児童では掃除や使いに重みがかかつていることができよう。殊に農山村に於ける男子の畑仕事女子の子守りの重みは他に比してかなり多い。

(家での勉強) — 第二、第三表参照 —

家での勉強は、前述の如く郡部に於ける山村、漁村、市内の貧困地區は他に比べて平均時間で二乃至三分の一に過ぎぬが、それは豫習復習宿題などの時間が他に比べて少ないことによつてゐる。一般に、學童の家庭での學習では、これらがその大部分を占め、自分の研究や特殊な稽古事は平均的には極めて少ない。只農村女兒では比較的このような課外の學習が多いことが認められる。

「學校での學習以外に何か自分で研究しているか」という補助質問に對する回答に於ても、第六表の如く、している者としていない者との比は、男一對一〇、女一對六で、前者は極めて尠ない。殊に山村では男女とも著しく少なく、又その種類も乏

しい。農村女兒はここに於ても他に比べて比較的課外の學習に従事していることが示されている。

(家での遊び) — 第二、第三表参照 —

男子に於ては家での遊びの過半は、外での遊びが占めて居り、女子に比し、全體の遊び時間が長い中に占める部分が多

第6表 郡部環境別個人研究狀況

環境別	男女別	回答總員	實施している(王)	實施していない(-)	王 %	(-) %	種類數	モ	
								イ	ド
都農山漁	市村	男	516	59	457	14	86	英・算理	理・英
		女	375	43	332	11.5	88.5		
	山漁	男	148	12	136	8.1	91.9	英・算理	理・英
		女	180	48	132	26.8	73.2		
市村	男	160	2	158	1.2	98.8	英・算理	理・英	
	女	160	3	157	1.9	98.1			音算・理
山漁	男	160	15	145	9.4	90.6	英・算理	理・英	
	女	145	15	130	10.4	89.6			音算・理

くここにある(平均時間で二〇分)。之に反し、室内の遊びや、讀書等に費される平均時間には、それ程著しい男女差はない。即ち遊び時間に見られる男女差は多く戶外遊戯にあるといえる。これは女子が男子よりも家庭に縛られるのと、或は小學六年生位の女兒になると戶外遊戯が少なくなるのによるのであらう。日本青少年研究所の調査では遊戯の場所を報告させているが、その結果でもこの點では略同様の傾向をみている(前掲書一二四頁)。

郡部に於ける遊び時間の平均には、山村男子が他の環境に比べて二〇分程度少ない他は殆んど環境差が示されなかつた。只勉強時間との比重に於てのみ著しい環境差があることは前述した通りである。戸内戶外の區別についても、女子では殆んど環境差なく、男子に於てのみ、特に農村では戶外遊びの割合が他より多い傾向が見られるに過ぎない。

然るに市内に於ては、前述の如く、遊び時間の勉強時間に對する比重に差があると同様、遊び時間の平均時間にも相當の環境差があつた。商業地區が最も少なく、工業地區が最も多いが、その違いは殊に男子の場合に著しい。商業地區の遊び時間の平均は男女とも六〇―七〇分であるが、工業地區では男は二時間半にも及んでいる。このような差は戸内戶外の區別に於てもみられるのであつて、商業地區では兩者相等しいのに工業地區

や貧困地區では、戸外は戸内の倍を越えている。女子の場合にも同様の傾向は存するがそれ程著しくない。

併しこの際考慮に入れるべきは、前述の如く商業地區男子が學校での遊び時間を多くもっていることである。この時間に關して他の環境より多い約四〇分を遊び時間の中に加えれば、それは知識人地區男兒の遊び時間に匹敵する。恐らく家の附近に適當な遊び場所なく、交通頻繁である中心商家地區では、戸外遊戯を要求する男兒はその遊び場所を學校に求めているのであらう。併しそれでもこの兩地區の遊び時間は郡部兒童より平均に於て特に多いといわれぬ。

このように遊び時間に於ける環境差について、從來屢々都會の子供と田舎の子供との對比で考えられていたものは、都會の一部環境（工業地區、貧困地區）のもののみについていえるのであつて、寧ろ都會内の種々環境の相違は、都會と田舎の差以上に著しいものがあるといわなければならぬ。このことは前述した手傳時間についても同様にいいうることである。

家での遊び時間の中に於ける讀書時間については、明らかに都會（市内）兒童が郡部兒童よりも若干多くの時間と割合とを示している（第一表）。平均でいへば男女差は全くないし、各環境の差も市内郡部夫々の中では殆んどない。

（團らん、娛樂）

團らんの時間は大體一日の二二三%、三〇分から一時間程度に亘るが、一般に市内の兒童に比し郡部の兒童が少ない傾向にあり、殊にその差はラジオ聴取や新聞をよむ時間の上に表われている。（平均郡部一〇・五分、市内一九分）市内に於ては工業地區知識人地區の方が團らん時間多く、殊に貧困地區は他に比べ少ない。郡部では餘り著しい環境差は見られな

（總括）

一、環境差や男女差の主として現われる生活時間は、睡眠や學校生活を除いた残りの二〇%程度の、手傳、勉強、遊び

時間に於てである。

二、郡部と市内とを總括的に比較すれば、前者に於て手傳時間が稍多く、勉強時間が稍少ない傾向がみられるが、郡部と市内という總括的な環境差よりも、夫々に於ける環境の違いの方が顯著である。

三、山村、漁村及び市内貧困地區では勉強時間が特に少なく、この地域に於ける學習への要求の少なさを示している。

四、手傳及び遊び時間の分配に於ては、郡部各環境間の差異は少なく、特に女兒では然りであるが、市内各環境間には男女ともかなりの相違がある。商業地區は手傳、遊びとも他より少なく、工業地區は他より多い。

五、一般に、女子は男子よりも手傳時間が多く遊び時間が少ないことは、本調査に於ても、又従前の諸調査に於ても確かめられた傾向であるが、かかる男女差は、山村を除く郡部諸地域及び市内貧困地區では特に顯著であり、學校での遊び時間の多いことを考慮に入れば、市内商業地區もこれに準ずる。(平均に於ては市内知識人地區工業地區は男子の手傳時間が多く稍この傾向を少なくしているが、後述中央値による比較ではやはりこの傾向が著しい)。ひとり、郡部山村ではこの男女差が然かく著しくない。

六、一般に女兒は男兒より勉強時間が多く、市内知識人地區と農村とにこの傾向が著しい。

七、家事の手傳は、その内容に於て郡部と市内とで相異がある。

(従前の調査結果との比較)

従前の調査、殊に生活時間量の調査として本調査と最も比較し得る前記、日本青少年教育研究所の調査と比較すれば、一、農村の學校生活時間がこれでは八時間を越えているが、本調査では七時間内外である。殊に本調査に於ける農村だけをとれば、市内と變らない。然し、郡部全體としてみれば市内兒童よりも稍長いことは本調査に於ても現れた。

二、睡眠時間にみられた環境差は本調査では全くみられなかつたといつてよい。又睡眠時間は全般的に従前より多くな

つている。

三、手傳時間にみられた農村、都市山手、都市下町の相違は、本調査では幾分大きく出ている。又手傳時間は全般的に稍多くなつている。

四、豫習復習等學習時間にみられた大きな相違は本調査には現われなかつた。併し、都市内でも山手と下町とで著しく異なるという傾向に相當するものとして、市内各環境間で勉強時間に相違のあることは認められる。

五、遊び時間にみられた農村と都市との大なる相違は本調査ではみられなかつた。工業地区貧困地区は遊び時間が著しく多かつたが、これは青少年教育研究所の調査にある東京山手下町とは事情を同じくするものとはいえない。

右の如く總平均に於ては著しい相違は認められなかつたが、環境的相違は手傳時間を除いて、全般的にその差をちぢめているといえよう。これは、東京と京都という都市の性格の相違並びに、戦前戦後という生活環境の相違にも基づくと思われるが、本調査では緒説にも述べた如く、文化的教育的水準を同一行政管区内にとつて揃えたのと、郡部或は市内を更に幾くつかの環境的特性とにわけたことにもよるのであらう。

二、生活時間量の分散及び中央値

度々いう如く、斯る生活時間の分配に於ては、その分散が大であり、且該當生活活動のないものも少くなく、その分散形態も正常分布をなすとはいひ難く、従て平均値による比較は、殆んど統計的意義を有しない危険がある。第二表、第三表に表示した各々の平均値は、比較的正規分布に近い睡眠時間と、殆んど分散を示さぬ學校生活時間とを除いては、その標準偏差は悉く平均値と變らず（市内工業地区の遊び時間のみ平均値 \pm に對し偏差は \pm 、一般に遊び時間のみが標準偏差が平均値よりかなり小さいが然し二分の一以下になつたのはこの市内工業地区のみである）到底統計的意義をもち得る

ものではない。斯る分散に於ては、平均値よりも四分位値の方がまだしも妥當である事はいうまでもない。従前の研究に於て何故平均値のみが用いられたのか不可解なのであるが、それは兎に角、われわれの資料によつて、特に上來環境的差異に於て主なる役割をもつ手傳、勉強、遊びの三つに就き、その分散及び四分位値による比較を試みようと思ふ。

(分布形態)

京都市内の分につき各十五分を單位とし、その分布の百分率を圖示したのが第一圖である。男子の手傳及び男女とも勉強時間は著しくJ型分布の傾向を示し、其他も小さい方に偏る非相稱分布である。このことは、該當活動のないものや比較的短時間のものが多いのであるが、少數のものに相當長い時間をとるものが分散している事を示す。今これらについて逐次考察を加えて行こう。

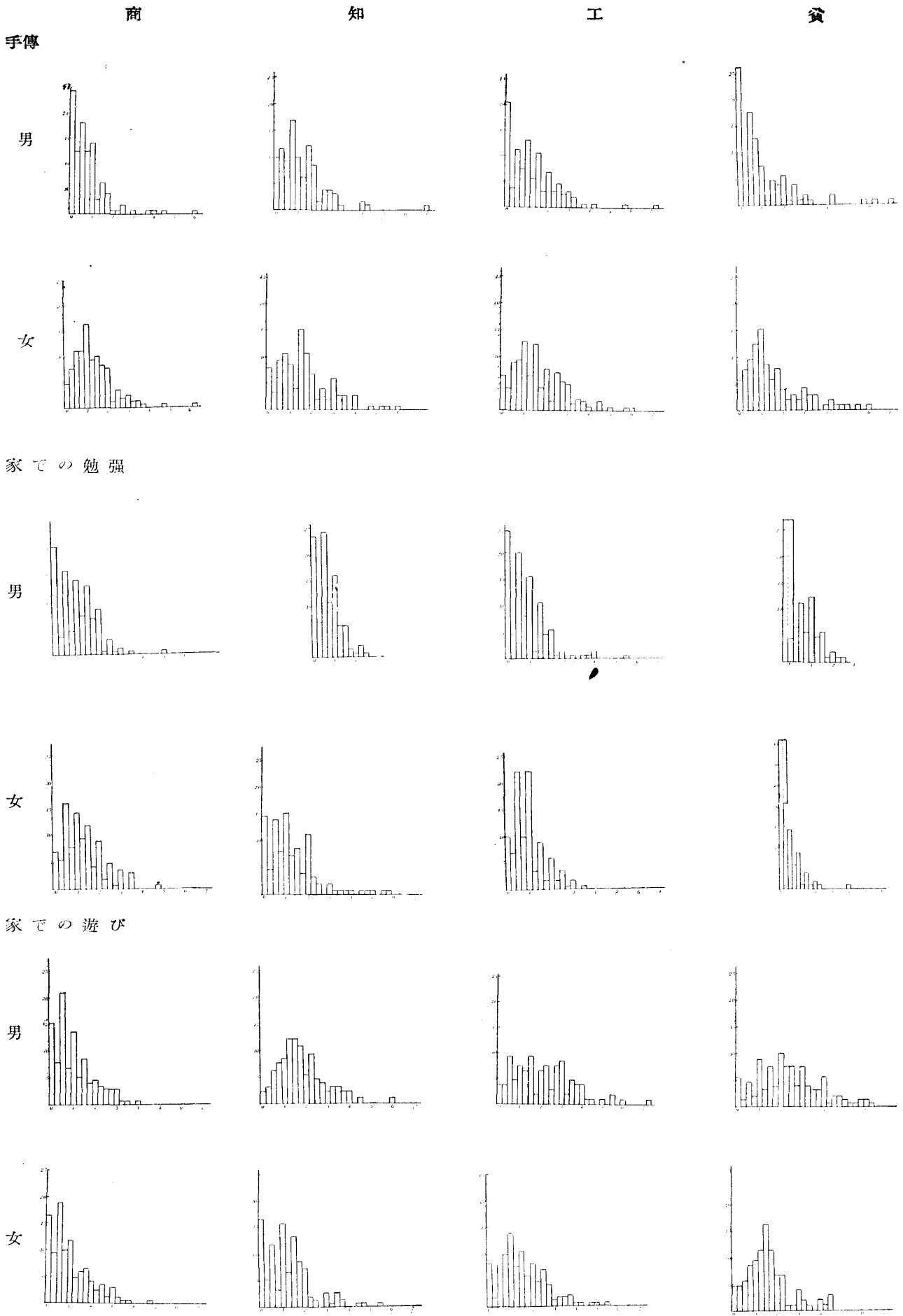
(該當活動のなきもの)

第七表は各環境に於て手傳、勉強、遊びについて、これを營まなかつたものの百分率を男女別に取出したものである(圖に於ける0の高さに當る)。女子で手傳をしないものは極めて少數であるが、男子には一〇—二五%位あり、一般に郡部よりも市内の方にこれが多いのであるが、市内知識人地區のみは郡部児童と變らぬ率であり、漁村は市内のそれに匹敵する。然るに女兒については市内では知識人地區に於ける参加者が他よりは少なめであり、郡部では漁村に不参加者が著く少ない。勿論これらの地區の男女

第7表 該當活動なきもの%

	男			女			
	手傳	勉強	遊び	手傳	勉強	遊び	
市内	商	24.3	20.3	15.3	4.7	7.1	16.5
	知	9.9	23.6	2.3	7.9	14.5	16.4
	工	20.6	23.8	6.2	6.4	10.5	8.2
	貧	26.2	49.5	3.7	5.7	51.4	4.7
比較	山手	38.2	14.3	15.9 (25.3)	21.3	14.3	15.9 (32.0)
	下町	21.4	67.9	4.0 (26.8)	0	20.7	18.3 (22.4)
府下	都	12.3	16.0	6.2	5.7	14.2	8.8
	農	13.8	34.1	8.5	2.4	8.2	9.2
	山	10.3	49.0	11.6	5.0	33.9	17.0
	漁	23.6	52.2	9.2	1.5	42.0	12.5
比較	農	13.8	13.9	40.5 (32.0)	12.2	50.0	46.3 (43.9)

比較は大日本青少年教育研究會の調査、()は讀書6年生の分のみ。



横軸 時間(單位15分)
縦軸 度數百分率

第8表 該當活動なきものを除いた平均値(單位分)

	男			女			
	手	勉	遊	手	勉	遊	
	傳	強	び	傳	強	び	
市	商	58.8	71.6	75.5	83.0	86.5	73.8
	知	78.9	63.4	107.8	102.1	87.6	92.4
	工	84.8	70.6	151.3	103.2	61.5	106.0
	貧	88.5	57.3	132.1	106.3	50.4	99.1
比較	山手	60.4	133.8	78.6	66.8	180.3	61.8
	下町	72.6	63.0	86.4	84.0	68.4	73.2
府	都	87.8	83.4	128.3	119.2	66.6	81.3
	農	93.7	68.5	123.5	108.1	59.9	74.6
	山	116.2	49.4	111.0	124.1	52.1	81.6
	漁	91.6	46.7	131.0	115.3	57.0	91.5
比較	農	75.0	73.2	64.2	76.2	33.0	70.2

比較は第7表と同じ

の相對的關係が相補的關係であるとはいえないが、兒童の家事手傳に對する環境の要求と兒童の參加要求とに於ける環境差の一面を示すものと考えられよう。これを日本青少年教育研究所の資料に比較すれば、本調査に於ては女兒の不參加者の少ないことが異なるだけで、男子に於ては前記知識人地區と漁村とを除けば、かなりよく一致している。

家庭での勉強をしない者の率は、環境によつて極めて顯著な相違がある。市内の貧困地區郡部の山村及び漁村は、この平均時間が短かつた如く、勉強しないものの率も他に比べて特に多く、兒童の半數近くがそれに該當してゐる。一般にこの率に於ても女兒は比較的少ないのであるが、前記三地區に於ては女兒も同様に多數の不參加者を數えている。この三環境に於ける家庭での勉強への要求の少ないことはここにも明らかである。其他、農村に於ては男子の勉強しないものの率が女子のそれに比べて特に多いことが注目されよう。これを青少年教育研究所のそれに比較すれば、數値は都市山手の

女子を除いてはかなり不一致を示している。

遊びについては、市内商業地區男女、知識地區女子、山村男子に、一〇%以上の遊ばなかつたものを見る他は、すべて一〇%以下で、やはりこれが最も普遍的な兒童活動である事を示している。これを青少年教育研究所のそれに比較すると市内はよく一致するが、農村の比率が著しく相違する。

(該當活動なきものを除いた平均時間)

右の該當活動なきものを除けば、平均時間は多少變化する(第八表)。特に0の多かつた地區や活動ではその平均値は倍増する所もあり、總平均にみたような環境差は縮少するが併し前節で示したよ

第9表 中央値、四分偏差、歪度 (單位分)

性別	活動別 環境別		手 傳					勉 強					遊 び				
			Md	Q ₁	Q ₃	Q	Sk	Md	Q ₁	Q ₃	Q	Sk	Md	Q ₁	Q ₃	Q	Sk
男	市 内	商業地區	26.0	10.2	53.3	21.6	1.13	51.3	16.2	86.0	34.9	0.64	43.1	16.3	81.5	32.6	1.11
		知識人地區	49.0	21.0	89.4	34.2	1.08	26.9	14.1	62.3	24.1	1.56	87.6	55.7	131.6	38.0	0.89
		工業地區	52.8	15.8	84.0	34.1	1.00	33.5	13.4	77.6	27.1	1.21	126.3	72.0	178.8	53.4	0.80
		貧困地區	29.2	11.4	79.5	34.1	1.90	13.4	6.5	46.7	20.1	1.41	112.5	51.6	170.8	59.6	0.53
	郡 部	都 市	53.0	20.5	98.5	39.0	1.26	43.4	16.6	71.5	27.5	1.78	93.0	53.0	161.0	54.0	1.20
		農 村	57.6	24.8	98.5	36.9	1.22	21.6	9.0	56.8	23.9	1.79	73.0	36.8	119.0	41.1	1.33
		山 村	73.4	28.4	130.0	50.8	1.13	16.2	7.8	41.0	16.6	0.91	59.7	11.3	120.0	54.4	1.38
		漁 村	52.5	23.7	130.0	53.2	0.87	12.9	6.5	28.5	11.0	1.11	89.5	45.0	155.0	55.0	1.06
女	市 内	商業地區	58.7	31.0	96.2	32.6	1.04	53.4	25.7	98.1	36.2	0.96	33.5	9.6	82.5	36.5	1.27
		知識人地區	81.9	36.6	118.5	41.0	0.68	51.5	21.4	102.5	40.6	1.09	58.6	19.2	96.9	38.9	0.83
		工業地區	77.5	39.2	137.9	49.4	0.87	45.2	20.0	73.3	26.7	0.72	75.4	40.4	122.4	41.0	0.94
		貧困地區	60.2	32.7	119.3	43.3	1.40	12.1	6.1	28.3	11.1	1.11	79.8	46.3	111.0	32.4	0.73
	郡 部	都 市	87.6	50.0	132.2	41.1	0.96	41.1	17.2	74.4	28.6	1.07	61.0	29.4	114.0	55.3	1.16
		農 村	82.5	50.5	133.5	41.5	1.19	51.6	24.7	71.0	23.2	0.72	53.3	28.9	75.0	23.2	1.04
		山 村	94.5	62.2	148.5	43.2	0.72	23.0	9.2	58.0	24.4	1.24	50.1	15.0	85.6	35.3	0.85
		漁 村	94.0	42.8	150.0	53.6	0.74	14.7	7.4	46.0	19.3	1.28	68.1	24.2	110.8	43.3	0.63

$$Sk = \frac{3(Av - Md)}{SD}$$

一六〇

うな男女環境差が失われることはなかつた。いかえれば、該當活動のないものの多い集團は、これらを除いた活動者の平均時間に於ても少ない傾向を示すので、前節での總平均値も、この限りでは必ずしも不當な代表値ではないといえるのである。青少年教育研究所の資料との比較については、前節末に述べた所と變らない。

(中央値、四分位偏差、歪度)

— 第九表

中央値は何れも平均より二〇—三〇分小さくなるが、平均値にみられた諸種の傾向はやはりこの場合も變らない。而もその傾向は一層顯著に現れるとい

うる。今繰返してその傾向を中央値によつて列記すれば

一、手傳時間は男子に於ては、市内知、工、郡部都市、農、漁に於ては何れも約五〇分で、これが普通とみられるが、市内商、貧の兩地域でその約二分の一少く、郡部山村は約二分の一多い。男子に對する家事手傳の要求が、市内右兩地區では少く、山村では多いといえよう。女子に於ては郡部各地區及び市内知、工の兩地區は約一時間二三分を示すが、市内商、貧の兩地區は一時間前後である。ここに於てわれわれは市内の商業地區及び貧困地區は一般に兒童への家事手傳の要求が他より少ないということができよう。市内貧困地區の女子の手傳時間は平均に於ては市内で最も長かつたが中央値ではかえつて知、工兩地區より少なくなつたのは、この地區の手傳時間が少ない時間の方により大きな偏りを示しながら、特別に長い方にも他より多い分散を示し、歪度が最も著しい事にあるといえよう。手傳時間に關して女子が一般に男子より多いことは平均に於ける傾向と同一であり、その差は何れも三四十分、ただ山村のみが上述の如く男子の手傳を多く必要としている。

二、勉強時間は、男子に於ては、市内知、工兩地區、郡部農村は約二三十分、市内商業地區及び郡部都市がこれより多く四五十分、市内貧困地區、郡部山村が少くて、十四五分である。手傳時間に於て市内知、工兩地區の男子が同様であつた如く勉強時間に於ても類似傾向を示すが、手傳時間で同傾向にあつた商、貧の兩地區は勉強時間では對照的な差異を示している。女子に於ては市内知、工、郡部都、農兩地區が夫々四五十分、市内商業地區が約一時間、山村が二十分、市内貧困地區と漁村が十二三分で特に少ない。市内商業地區が勉強に對して最も大きな要求を示し、市内貧困地區及び山漁村はこれへの要求が最も弱いといえる。商業地區及び郡部都市では男子に對する學習の要求が強いといえよう。一般に女子は男子より勉強時間が長いが、勉強への要求の強い環境と弱い環境とでは、何れもその差が少くなる。

三、遊びの時間は男子に於ては市内知識人地區郡部都市漁村が、一時間半程で、農村がこれより稍少ないが、大體一時

間二三十分が一般的といえるだろう。これに對し、市内工業地區及び貧困地區は二時間内外に上り、一方商業地區及び山村は一時間乃至それ以下で最も少ない。併し前述した如く、市内商業地區では學校での遊び時間が多くこれを考慮に入れば特に遊び時間そのものが少ないとはいえぬかもしれぬが、家庭での遊び時間を制約するものがある事は考えられなければならぬ。

女子では、郡部各地區は若干多少はあつても一時間前後で、殆んど環境的差異はないが、市内では知識人地區がこの水準にあるだけで、工賃の兩地區では男子と同様遊び時間が二十分程多く、商業地區では二十分程少ない。市内貧困地區と工業地區とは、子供の家での遊び時間を制約する環境的要因が他より少なく、商業地區ではかかる要因が特に強いのであらうと考えられる。知識人地區と工業地區とは手傳及び勉強に關しては同傾向を示していたが、遊び時間に關して相異を示させるものがあると考えられる。山村男子の遊び時間の少ないのは恐らく手傳時間と相補的なのではないだろうか。一般に遊び時間は女子の方が少ないが、この傾向は何れの環境にも共通である。只山村のみは男子の遊び時間の少ないため、その差は少なくなつてゐる。

第10表 中央値による勉強時間に對する手傳、遊び時間の比

		男			女		
		勉強	手傳	遊び	勉強	手傳	遊び
市内	商知	1	0.5	0.8	1	1.0	0.7
		1	1.8	3.3	1	1.6	1.1
	工貧	1	1.6	3.8	1	1.7	1.5
		1	2.2	8.4	1	5.0	6.6
郡部	都農	1	1.2	2.1	1	2.1	1.5
		1	2.7	3.4	1	1.6	1.0
	山漁	1	4.5	3.8	1	4.2	2.2
		1	4.1	6.9	1	6.4	4.7

四、平均値に於て試みた如く、勉強時間に對する手傳及び遊び時間の比を、中央値に就いて試みれば第十表の如くである。その對比は平均値によるものよりも一層明瞭にみられる。

五、右によつてわれわれは、兒童の生活時間の分配については、一應、市内の知識人地區と郡部の農村とを標準的なものとして、とりだすことが出来るであらう。この兩環境に就いては大體手傳男五十分、女一時間二十分、勉強男二三十分、女五十分、遊び男一時

間二十分、女五十分といふ分配で、勉強時間に對する手傳及び遊び時間の比は、男 $1:1.25$ 、女 $1:1.5$ である。これに對して、工業地區は遊び時間が多く、商業地區は手傳時間遊び時間が少く勉強時間が多く、貧困地區は手傳及び勉強時間が少く遊び時間が多し。郡部漁村は勉強時間が少なく、都市は男子に於て勉強時間が多く、山村は勉強時間が少なく、且男子に於ては手傳が多く遊びが少ないということ、その環境を特色づけることが出来るであろう。

以上のことがらは、 Q_1 及び Q_3 にもそのまま現れることが期待されるが、分散の相違のために、必ずしもそのまま現れるとはいえない。主なる偏倚をあげれば、

一、手傳 貧困地區の男子及び漁村の男子は Q_3 が大きく、 M_d から Q_3 までの分散が他に比べて粗である。歪度は貧困地區男子が最も大で、短時間の方への偏りが大である。

二、勉強 貧困地區の女子と漁村の男子は Q_3 が著しく小さく四分偏差も小で、短時間の方へ密集している。

三、遊びは、分散及び歪度も、あまり著しい相異はない。

以上分散を考慮に入れつつその代表傾向をみてきたのであるが、分布の歪度はすべて正で短かい方に偏り、恰もポアソン分布に類似する變化を示すものであり、その意味で必ずしも不規則ということは出来ない。個々の分布については夫々特殊な偏倚が存在するけれども、中央値及び四分偏差値によつて考察した所は、殆んど平均値によつて看取された傾向を確め且強化するのであつて、われわれは、少くともこの見本については、上述した如き環境的特性をいうことができる。勿論この見本の一般的代表性や、統計値の信頼度に關する檢定は、緒説に述べた如く本調査が有意抽出であることから問題を残すのであり、今後の研究にゆだね度い。

三、環境の意義について

われわれは、上來環境を學校所在地の全般的地域の職業水準によつて取扱つてきた。併し例えば、商業地區という環

第11表 各地區に於ける商業の數

	男		女	
	實數	總員に對する%	實數	總員に對する%
商業地區	99	57	64	39
知識人地區	38	29	41	29
工業地區	60	38	42	25
貧困地區	59	44	55	42

第12表 各地區内商業家庭の生活時間 (單位分)

	手 傳			勉 強			遊 び			
	Av	Md	Q	Av	Md	Q	Av	Md	Q	
男	商	37.0	28.1	20.8	57.9	55.6	35.1	64.8	46.4	36.2
	知	64.7	40.7	36.3	48.9	32.4	22.5	99.8	90.0	41.4
	工	84.3	57.0	48.0	56.5	33.8	12.8	162.0	138.8	53.8
	貧	40.6	20.6	16.6	34.8	13.8	20.3	117.7	109.5	54.3
女	商	71.9	60.0	31.5	72.7	61.7	29.2	61.9	36.4	34.9
	知	97.1	78.8	50.6	89.6	63.8	19.6	72.6	60.0	33.7
	工	123.6	75.0	45.7	56.0	46.2	43.9	95.4	75.0	34.7
	貧	78.8	50.4	32.3	22.4	10.6	6.6	92.2	81.6	36.1

境の特徴は、このような廣い地域の雰囲気にあるのか、或いは個々の家庭の職業的特質によるのかという疑問が存する。

この點に關する一つの吟味として、われわれの京都市内の資料のうちから、各地區毎に、兒童の家庭の職業が實際商業であるものを選び出し、各々について、手傳、勉強、遊びの時間を算出し、これが上述商業地區の特徴に近いか、或いは各地區の特徴に近いかを調べてみた。その選出人員は第十一表の如くであつた。

時間及び遊び時間を表示すれば、第十二表の通りである。

これらは何れも、各地區の特徴を示しており、環境的規制は家庭職業によるよりも、その地區の全體的特性によるものなることを證している。

第三章 生活時間と學業成績及び知能

生活時間を知能及び學業成績別に比較することを試みたが、併しこの際、これを更に各環境毎に行うことは、餘りに人員が少なくなり統計的意義を失うので、只全般的に郡部と市内とに分けるのみに止めた。そのうち特に手傳、勉強及び遊びの時間をここではとりあげる。

第十三表は學業成績別に、第十四表は知能指數別に示したものである。成績別の傾向と知能別の傾向とは略々一致する。そのうち最も著しいのは、いふまでもなく家での勉強時間である。成績のよいものほど、知能の高いものほど、勉強時間

第 15 表 學 業 別 生 活 時 間 (單位分)

		男												女											
		手 傳				勉 強				遊 び				手 傳				勉 強				遊 び			
成績		Av	Md	Q	無し の%	Av	Md	Q	無し の%	Av	Md	Q	無し の%	Av	Md	Q	無し の%	Av	Md	Q	無し の%	Av	Md	Q	無し の%
市 内	優	61.6	36.8	31.4	17.8	64.8	52.7	27.8	9.5	95.1	77.0	50.0	10.1	97.5	70.0	38.0	7.0	84.5	58.0	39.2	7.0	74.0	55.9	33.0	12.0
	良	63.2	38.3	36.0	21.2	45.5	26.7	24.6	30.0	107.4	86.0	56.0	6.9	99.6	69.0	40.0	5.0	66.2	35.5	29.3	19.7	89.5	65.5	41.9	11.8
	可	55.9	40.5	33.8	21.4	42.4	14.1	30.3	44.8	125.6	92.0	52.0	6.1	97.4	69.0	38.0	13.5	56.5	30.0	32.8	30.7	86.7	56.3	46.8	15.9
郡 部	優	73.6	55.7	30.0	12.0	71.3	48.2	29.0	17.6	95.0	82.8	54.0	6.9	100.7	90.0	51.8	2.8	59.1	50.7	35.7	11.6	62.2	49.2	42.5	14.9
	良	78.3	46.7	37.5	19.7	35.1	30.0	26.0	21.3	116.6	85.2	66.5	6.9	98.6	88.0	50.0	5.2	42.0	28.8	29.9	21.9	72.6	61.8	46.2	9.9
	可	99.5	60.0	46.5	13.1	39.0	12.5	19.1	54.5	122.9	87.4	35.0	11.9	101.9	94.8	52.8	7.7	32.5	17.6	28.8	33.5	87.3	77.4	45.6	9.1

第14表 知能別生活時間 (單位分)

男												女												
I	Q	手 傳			勉 強			遊 び			無し %	Av	Md	Q	無し %	Av	Md	Q	無し %	Av	Md	Q		
		Av	Md	Q	Av	Md	Q	Av	Md	Q													Av	Md
市 内																								
121 以上	48.3	37.3	32.0	20.6	60.3	50.5	27.2	4.6	80.4	70.2	50.1	11.1	75.5	64.1	40.3	7.3	70.6	52.5	39.0	4.3	76.3	56.8	36.4	15.4
101—120	53.7	39.5	35.0	18.3	50.8	37.4	25.6	9.3	74.9	62.7	49.8	7.5	90.6	71.6	43.6	5.5	72.0	49.9	41.3	13.6	61.9	40.9	40.0	12.0
81—100	56.4	40.2	34.2	21.5	41.8	22.2	26.3	48.1	86.4	77.3	51.7	3.6	86.5	70.8	41.5	9.7	53.4	24.7	26.7	30.3	67.6	47.3	41.7	10.3
80 以下	11.5	8.5	8.0	25.7	0	0	0	100	89.1	75.6	57.0	3.2	40.4	23.9	27.1	11.1	51.7	20.8	29.3	41.1	107.4	83.6	56.0	11.1
郡 部																								
121 以上	85.1	62.2	31.2	13.1	75.5	62.5	30.5	18.1	83.6	73.0	48.2	7.2	115.8	97.3	52.0	2.5	53.7	51.1	30.4	10.7	52.5	36.2	31.0	16.6
101—120	70.6	43.6	39.5	17.3	43.3	31.5	34.6	23.9	118.8	89.6	63.2	9.4	114.5	90.5	51.5	5.0	48.8	36.2	35.7	19.3	77.6	52.4	42.0	11.7
81—100	80.6	51.5	42.6	9.8	34.6	13.0	20.8	49.0	103.0	80.5	60.3	8.3	108.0	84.0	50.0	6.3	49.7	25.4	27.3	38.8	81.6	68.1	48.4	14.5
80 以下	100.2	65.1	59.7	15.4	22.2	11.0	18.8	62.2	109.0	55.0	51.4	9.9	122.8	93.1	59.4	7.7	49.2	20.0	25.5	49.1	80.7	65.3	44.1	7.2

が多く、その傾向は男子の方が著しい。郡部に於ける女子は知能別にはそれほど著しい差を平均値の上では示さないが、中央値並びに勉強しないものの率の上では、何れも明瞭にこの傾向を示している。成績の優は知能の上のもの、成績良のものは知能中のもの、成績可のものは知能下のものに相当すると考えれば、兩者の傾斜は略一致すべきであるが、一般に知能別の傾斜よりも成績別の傾斜の方が急である。このことは、成績の優のものは、知能別の水準より勉強時間の長いものが多く、成績可のものには、それが短いものが多いことを示すと思われる。然もこの傾向は市内より郡部の方に多くみられるが、このことは學業成績が市内に比べて、郡部では、より多く勉強時間に關係していることを示すのではないであらうか。

第 15 表 家での遊び時間, 成績別 (単位分)

	性別	成績	全遊び 時間	外で 遊ぶ	内で 遊ぶ	本を 読む	内 ／ 外	内 ／ 全	読 ／ 全
市	男	優	95.0	24.0	18.0	42.5	0.75	0.19	0.48
		良	107.4	27.0	28.5	22.5	1.05	0.27	0.21
		可	123.6	40.5	28.5	18.0	0.70	0.23	0.15
内	女	優	74.0	19.0	17.5	45.0	0.92	0.24	0.61
		良	89.5	16.5	21.0	28.5	1.27	0.24	0.32
		可	86.7	25.5	22.5	21.0	0.88	0.26	0.24
郡	男	優	95.0	47.0	16.0	26.0	0.34	0.17	0.27
		良	116.0	64.0	29.0	18.0	0.50	0.25	0.16
		可	122.9	44.0	31.5	13.0	0.71	0.26	0.12
部	女	優	62.2	27.0	15.5	23.0	0.57	0.25	0.37
		良	72.6	22.0	24.0	19.5	1.09	0.33	0.27
		可	87.3	29.0	27.0	17.5	0.93	0.31	0.20

第 16 表 家での遊び時間, 知能別 (単位分)

	性別	I Q	全遊び 時間	外で 遊ぶ	内で 遊ぶ	本を 読む	内 ／ 外	内 ／ 全	読 ／ 全
市	男	121 以上	80.4	24	21	31.5	0.88	0.33	0.39
		101—120	74.9	27	22.5	22.5	0.89	0.30	0.30
		81—100	86.1	34.5	34.5	15	1.00	0.40	0.18
		80 以下	89.1	55.5	33	4.5	0.60	0.37	0.05
内	女	121 以上	76.3	10.5	15	37.5	1.48	0.20	0.49
		101—120	61.9	13.5	16.5	21	1.22	0.27	0.34
		81—100	67.6	21	18	15	0.86	0.27	0.23
		80 以下	107.4	24	54	21	2.25	0.50	0.18
郡	男	121 以上	83.6	28.5	14	36	0.49	0.17	0.44
		101—120	118.8	68	20	27	0.29	0.17	0.23
		81—100	103.0	50	29	14.5	0.58	0.28	0.15
		80 以下	109.0	48	38.5	14	0.79	0.35	0.14
部	女	121 以上	52.5	16	9	24	0.56	0.17	0.46
		101—120	77.6	19	20	24	1.05	0.26	0.31
		81—100	81.6	25	27	20.5	1.08	0.33	0.25
		80 以下	80.7	23.5	26	20	1.10	0.32	0.24

手傳いの時間には、知能別、成績別による規則的な傾向はなく、殆んど同じである。只市内に於て知能八〇以下のものは男女とも、手傳時間が著しく少ないが、郡部では却つて稍多い傾向さえみられる。一般に知能の高いものの主な仕事は掃除であり、低いものは「其他」に屬するものが多い。郡部における男子の「お使い」、女子の「掃除」は知能の高い方に多く、畑仕事や手守りは知能の低いものの方に多い傾向がある。只山村では畑仕事が知能の高いものの主要な仕事となっている。漁村に於いては、「其他」の仕事が女子に非常に多く知能の高いものもこれに参加している、市内では知能による手傳内容の相違は極めて少ない。

遊び時間でも亦餘り顯著な傾向はみられない。成績の悪いものほど遊ぶ時間が長めになる傾向がみられるが、中央値では郡部の男子、市内の女子には、そういう傾向は認められない。知能別には、郡部で知能の高いものが稍々遊び時間の短かい傾向があるが市内では斯かる傾向はない。併し、遊び時間の中に占める讀書時間の割合は、知能の高いものほど、又學業成績のよいものほど、大きくなる。(第十五、十六表)

結 論

生理的社會的に強く束縛されているとみられる生活必要時間、學校生活時間は、平均的にみると、學童の生活時間として、性差環境差による相違は比較的少なく、又従前の諸調査の結果と比較しても殆んど變らない。環境的に最も相違が豫想されるのは、家事の手傳、家庭での學習、家庭での遊びの配分にある。われわれは以上の調査の結果により、これらの時間の配分の標準として、市内の知識人地區、郡部の農村を指摘することができた。他の環境は、これより或いは長く或は短かく、夫々の特徴に於いて兒童の生活時間の分配を偏倚させる環境的特徴をもつている。そしてこれらの特徴はこれを時間量の差に於いてみれば、僅く二三十分の増減に過ぎないのであるが、手傳、勉強、遊びの相對的な比重に於いて

考える時、著しい特徴のあることを指摘することができたのであつた。

手傳時間に關しては市内商業地區貧困地區は、これへの要求が少ないという特色をもち、山村は男子の手傳に對する要求が特に強い地域であるが、他の環境では、何れにおいても児童は児童としてその環境に應ずる家事の手傳いとしての仕事を同じ位營んでいたのである。殊にこの傾向は従前の調査に比較して近時増加をみたといわれうるであらう。併し一般には、郡部は手傳いが過重であり、市内では少ないと考えられがちである。それはむしろ、仕事の量より内容によると思われる。

郡部では、畑仕事、子守りなどが主な仕事であるが、都市では掃除や使いが主なる仕事となつてゐる、これを比較してみると、後者は比較的時間の區切りが短かくつき易いものであるのに對し、前者は大人の都合によつて左右され易く、時間的にはルーズに長くなりがちな種類である。そこに兩者の手傳時間に自から長短の相違がやすい性質が存する。のみならず後者は、比較的知能の高い児童の仕事であるのに對し、前者は寧ろ知能の低い児童に課せられる仕事であることは、この調査で認められたことである。そこに仕事の要領に對する児童自身の處理の相違も生ずるであらう。併し重要なことは、畑仕事にせよ、子守りにせよ、直接農山村の生業に關與し、或いはこれを援助する生産的な性質を帯びるものであるに對し、都市に於ける掃除其他は家庭生活の小さな一部分で、直接家業其他生産方面に關與するものではない。その性質は、従來の通行觀念からいえば、女性的であるといえよう。都市の男子殊に使用人を多くもつ商業地區の男子が、農山村の男子に比べて仕事の性質からくる手傳い範圍が極めて制限されるのも當然である。そこには手傳いに對する児童の側からの自發的な面よりも、大人の社會環境からの他動的なものが強いのであるから、^一大人が児童の手傳いに教育的な意義をどれほど認めるかによつて、又その手傳いの量にも相違がでてくるであらう。

手傳時間の長短は直接には勉強時間の長短とは結びつかぬようである。手傳時間が同じ程度でも勉強時間、遊び時間の

配分にはかなりの環境差がみられる。勉強時間の大部分が自發的な豫習復習で占められていることは、この自發的な學習意欲が勉強時間の多少を最も決定するものであることを示すであろう。従つて知能の優秀なものには、手傳時間は多くても又勉強時間も長いのであつて、手傳時間が三四十分多いことが、三四十分の勉強時間を阻害する原因になるとはいわれない。手傳時間の多いことが學習意欲を邪げるのではなく、寧ろ學習への要求の如何が勉強時間に表われるのである。従つてわれわれは、家庭での學習時間の少ない山村漁村及び貧困地區は、環境そのものに學習を誘發する要因が少ないとみてよいと思う。環境による勉強時間の長短の差は、寧ろ知能中程度のものに學習意欲が如何に誘發されるかにかかつていられると思われる。都市ではそれが宿題の形で、かなり強制されている。農村では宿題のはかに、塾の利用がこれらのものの勉強時間を多くしている。宿題そのものの教育的な意義は暫く措き、學童の家庭での生活時間の幾分かが學習に割かれることに教育的意義があるものならば、何等かの形でその學習意欲を誘發することも必要と考えられる。殊に知能中以下のものに、又漁村山村や貧困地區に於ては、必要なのではないであろうか。

家での遊び時間が男女差環境差によつて相違する最も大きな部分が、戸外での遊びであつて、戸内での遊びや讀書の時間でないことによつて、遊び時間の少ないことは兒童の社會性の培養と無關係ではないとみられる。彼らのすきな遊びの大部分が戸外での集團的な運動的な遊びであるから、これが比較的少ない女子や山村並びに市内商業地區は、その社會性に幾分の影響があるのではなからうか。山村に於ける手傳時間の多いことは、勉強時間よりもこの遊び時間の方により大きく影響するようである。商業地區は適當な戸外の遊び場所をもたぬ制約が大きいのではなからうか。何れにしてもこれをその環境における當然のこととしてしようのは教育的意志の放棄であろう。

生活時間の環境的相違は人が直觀的に考えるほど、或は相對的な比率によつて考えられるほど、實際時間としては大きくない。兒童の生活の内容をなし、その精神的成長に種々の特異性を與えるものは、寧ろ生活環境に於ける經驗内容その

ものの相違にあるであろう。生活時間の配分は生理的に社会的に経済的に殆んど一定の割合に制約されているといえよう。この定形化している生活時間の配分の中に於て児童が攝取し創造する生活内容は、多分に環境の教育的配慮に左右される。限られた生活時間の中に最も効果的な経験内容を生かすことが、生活教育の重大課題である。

附記、本調査は昭和二十二年度文部省學術研究會議教育問題特別委員會「教育の實態」研究班（班長當時京都大學文學部長本田義英、幹事京都大學教授矢田部達郎）が京都府學務課の協力の下に行つた研究の一部である（研究擔當者京都大學助教授 園原太郎）。本調査の實施及び集計は、京都大學心理學教室の全員をあげて行われた。殊に集計整理に盡大な努力を拂つた大西憲明、本吉良治、梅本堯夫、廣田君美、末廣正昭、關昌子、竹本照子の諸氏の勞を茲に特記して置きたい。

児童の生活實態調査に関する注意

先生方への御願ひ

新しい教育指導指針では先生方自身の計画設定が極めて重要な位置をしめます。いろいろな作業単元を計画される時に、児童生活の動態について知つてゐることは非常に大切です。この調査にもその意味で先生方の積極的な御協力を特にお願ひします。

記入指導の注意

1. 児童には之が先生方や学校からの取調べではなく児童自身の研究報告であるといふ趣旨を十分理解させ、正直に書入れるやうつとめて下さい。記入はすべて鉛筆でさせて下さい。
2. 調査用紙の左方は普通の調査法の通りです。之は用紙を渡した日に書入れさせて下さい。
3. ※印の處は先生方で記入して下さい。I.Q 欄の右の欄は児童の學業状態につき、十分能力を發揮してゐる(A)、先づ普通である(B)、能力が十分に發揮されてゐない(C)、をA.B.C.の記號で、學業成績を優良可により記入して下さい。
4. 調査用紙の主部分を占める生活の時間的記録の部分は、よく注意を與へて間違はぬやうに記入させて下さい。

3. ※印の處は先生方で記入して下さい。I.Q 欄の右の欄は児童の學業状態につき、十分能力を發揮してゐる(A), 先づ普通である(B), 能力が十分に發揮されてゐない(C), をA.B.C.の記號で、學業成績を優良可により記入して下さい。
4. 調査用紙の主部分を占める生活の時間的記録の部分は、よく注意を與へて間違はぬやうに記入させて下さい。
 1. 用紙を渡した日には上部の注意をよく讀ませ、調査用紙の各項目に熟知させて下さい。そして便所に行くとか、風呂に入るとか、子供にとって些事と思はれることでも、その日一日にしたことは覚えてゐて書入れるのだといふことを呑みこませて下さい。
 2. 記入は翌日學校で一齊に課業として與へて下さい。
 3. この欄の横の線は午後4時から午後11時迄を15分毎に刻んであります。縦の欄を注意してよんでそれに當る欄に○を書入れさせて下さい。
 4. 勉強や遊びの如く長時間に亘るものは、その時間中の各欄に○印を連續記入させて下さい。
 5. 上欄に書いてある項目以外の活動項目(したこと)があれば最後の空欄に書入れ該當する時間欄に○印を書かせて下さい。

結果整理上の注意

この調査を各校で御利用になるためには色々利用の仕方に於て整理のやり方がありましようが、ここに我々の意圖してゐる大要を申し上げて御參考に供しませう。

1. 分類の大別、地域別、男女別、職業別、知能別、學業状態別。
2. 上記の分類別毎に家庭の學習状態、學校に對する態度、學科の好惡を調べる。
3. 生活時間調査は各事項目毎に消費時間を集計し、それらが學童一日生活中に占める時間上の序列を見出す。
4. 一日を 起床—登校、登校—晝食、晝食—下校、下校後—夕食、夕食—就寢、の區劃に従つて活動状況の分布圖を作る。
5. 以上を(1)の分類別に従つてその特徴を見出す。

えてゐて書入れるのだといふことを呑みこませて下さい。

2. 記入は翌日学校で一齊に課業として與へて下さい。
3. この欄の横の線は午後4時から午後11時迄を15分毎に刻んであります。縦の欄を注意してよんでそれに當る欄に○を書入れさせて下さい。
4. 勉強や遊びの如く長時間に亘るものは、その時間中の各欄に○印を連続記入させて下さい。
5. 上欄に書いてある項目以外の活動項目（したこと）があれば最後の空欄に書入れ該當する時間欄に○印を書かせて下さい。

結果整理上の注意

この調査を各校で御利用になるためには色々利用の仕方に於て整理のやり方がありましたが、ここに我々の意圖してゐる大要を申し上げて御参考に供しませう。

1. 分類の大別，地域別，男女別，職業別，知能別，學業狀態別。
2. 上記の分類別毎に家庭の學習狀態，學校に對する態度，學科の好惡を調べる。
3. 生活時間調査は各事項目毎に消費時間を集計し，それらが學童一日生活中に占める時間上の序列を見出す。
4. 一日を 起床—登校，登校—晝食，晝食—下校，下校後—夕食，夕食—就寢，の區劃に従つて活動狀況の分布圖を作る。
5. 以上を(1)の分類別に従つてその特徴を見出す。
6. 以上を綜括して知能と學業とに著しい差のあるものの生活狀態を研究する。

別表 I

自分の一日がどんなふうに費されているかを記録することは大へん大切なことでありおもしろいことである。今日一日をよく注意していきましょう。そして明日學校で先生のお話を聞きましょう。

ナ マ エ	男 女	
學 校	京都府 市	郡 區
小學校	年	
生年 月 日	昭和 年 月 日 (滿 年 月)	
家ノ職業	家族 祖父 祖母 父 母 兄 人 姉 人 弟 人 妹 人	
好キナ學科 學科ノナマエ	何故好キデスカソノワケ	
キライナ學科 學科ノナマエ	何故キライデスカソノワケ	
スキナ遊ビ 遊ビノナマエ	何故スキデスカソノワケ	
今一番ホシイモノヘ何デスカ。三ツホドカキナサイ		
家デ勉強シマスカ 毎日スル	時々スル	メツタニシナイ
家デ勉強ヲ誰カニナライマスカ 自分一人デスル	母ニナラウ 兄ヤ姉ニナラウ	父ニナラウ ヨソニナライニ行ク
學校デナラウコトノ他ニ何カ自分デ研究シテイマスカ		
學校ハ樂シイデスカ	何故デスカ	
樂シイ		
樂シクナイ		
學校ガモツトコウナツタライイト思ウコトガアリマスカ		
ナイ		
アル	ドンナコトデスカ	
組ガモツトコウナツタライイト思ウコトガアリマスカ		
ナイ		
アル	ドンナコトデスカ	
アナタハ一年カラズツトコノ學校ニイマシタカ。イタ、イナイ、途中デカワツタ人ハドコノ學校ニイタカ各學年毎ニ次ニカイテ下サイ		
一年	二年	三年
四年	五年	六年
※學校所在地ノ環境特徴		
市街	農村	漁村 山村 商業地 工業地 住宅街
※I.Q.	※學業狀態	※成績

起キタ時 寢タ時	時 時	分 分	生必 活ノ要	手・傳
家カラ學校マデ歩イテ ドノ位カカルカ	分 分	分 分	モ 者 ニ テ	子 守 事 リ
	ネ ム ル	物 ヲ タ ベ ル	便 所 ヘ ユ ク	オ オ 子 守 事 リ
時	午前4			
昭和二十二年	5			
月	6			
日	7			
曜(テンキ)	8			
ノ私ノ生活	9			
	10			
	11			
	午後1			
	2			
	3			
	4			
	5			
	6			
	7			
	8			
	9			
	10			
	11			

別表 Ⅲ

調査日 年 月 日 曜 候

職業 環境 好悪 遊ビ	府 縣 郡 市 町 村 區							家 族 IQ	父 母 IQ	同 胞 數	學 校 組			其 他	男 女 計	No.	生 滿			
	1	2	3	4	5	6	7				A	B	C					成 績 優 良 可		
	國	算	理	社	家	圖	工													
	國	算	理	社	家	圖	工													
	名 分類							理由			ホシイモノ									
	家庭勉強			指導者				研究												
	1	2	3	理由				1	2	3	4	5	6							
學へ 校ノ 起 度 床	樂	不						學校	組											
	4	5	6	7	8	9	10	11	就寢					通學						
生 活 時 間	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5					
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	1	2	3						
仕事ノ種類	+				遊ビノ種類				+											
	-								-											

整
理
カ
ド